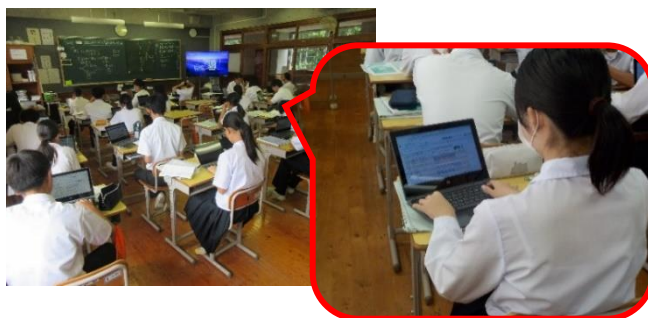


授業実践終了

単元を1つ丸々お借りすることで、ようやく生徒たちは授業の流れを掴んだ様子でした。授業の最後にはその1時間の学習内容や学習方法を振り返って書き残すようにしています。その1時間の中でできるようになったことや分かるようになったことを書くことで、メタ認知を促すのはもちろんのこと、分からなかったことや新たな疑問を書き残したりしておくことで、次の授業で取り組むべきことを明確にすることが狙いです。



全部で19時間ほどの単元でした。ある程度の見通しをもってスタートしたはずの授業でしたが、いざ始まってみると未知との遭遇ばかりで、常に何かに追いつけられるような気分をずっと味わっていました。

「もしかすると知識の定着には一斉指導の方が良いのかもしれない」ということもありました。実際に「先生に説明してもらいたい」と言う生徒もいました。しかし、繰り返し説明の動画を見て学習する生徒や、

教科書をじっくり読んで内容を理解しようとする生徒の姿を見て「説明をしてもらおうかどうかも自分で選択して学習できた方が良いのだ」と思うようになりました。

中には私語をたくさんしてしまう生徒や、寝てしまう生徒、答えや他人の考えを写すだけで終わらせる生徒もいました。そんな生徒を発見するたびに「やはりこのやり方には限界があるのかもしれない」という考えが頭をよぎりました。しかし、多くの生徒は仲間と教え合い、学び合い、疑問を共有して共に解決しようとする姿や、分かるようになるまで何度も教師に聞きに来る姿を見せてくれました。特に、最初はあまりやる気を見せなかった生徒が「分かるようになりたい」「解けるようになりたい」「解けたら面白い」と言って一生懸命学びに向かう姿は、私の弱気な心を奮い立たせてくれました。



できない理由を並べようと思えばいくらでも思いつきます。しかし、今回の授業形態（複線型）に挑戦したことで、生徒がそれぞれのペースで学習を進められたのはこの取組のメリットだったと考えます。また、声をかけるべき生徒に教師がすぐに対応できたり、生徒同士で声を掛け合って学習に臨んだりすることができたのも事実です。これから私たちが考えなければならないのは、どうすればこのやり方をうまく運用できるかという部分ではないでしょうか。

児童生徒1人ひとりと向き合うための複線型の授業を一緒に考えていきましょう。

実践を通して大切だと感じたこと



児童生徒にこの方法で学習する意義をはっきり伝えること

簡潔・明瞭に説明する。
児童生徒と合意形成する。



学習方法を明確に示して十分な時間と場所とツールを準備すること

I C Tで効率化を図る。
授業の途中で何度か達成率を確認する。



児童生徒と教師の関係づくり・児童生徒同士の関係づくりに努めること

児童生徒が教師を頼れる雰囲気と児童生徒同士が助け合える雰囲気づくり。
(心理的安全性)

第2回不登校・不登校傾向対策委員会

10月24日(木)に第2回の不登校・不登校傾向対策委員会を実施いたしました。今回リモートで講師をしてくださったのは、北九州市立大学 教授 楠 凡之(くすのき ひろゆき)氏です。

数々の具体的な事例を踏まえて、学校というシステムの機能不全について触れながら、どのように児童生徒とかかわりを作っていくべきか、学級や学校をどのような場所にしていくのが望ましいかをお話しいただきました。



「『明るく元気に』振舞う子どもたちの姿に騙されて、内面に隠された真実が見えなくなっている」

「まずは子どもたちの本当の思いや願いを聴き取ることが不可欠」というお話がありましたが、私たちは「教師」として子どもたちと接する中で「大人にとって都合のいい姿」のみを肯定してしまっているのではないのでしょうか。その結果、子どもたちは「本当の思いや願い」を出せなくなっているのかもしれない。私はこれまでの自分の生徒への声掛けや眼差しを思い返してドキッとすることがありましたが、皆さんはいかがですか。

委員会終了後、しばらく楠教授のご厚意で個別の質疑を受け付けてくださりました。熱心に自校の児童生徒について相談される先生方の姿も見られました。

